



書評

価格はすべて10%税込です

80歳からの養生と援助の工夫

神田橋條治著

岩崎学術出版社, 四六判200頁, 2,750円, 2025年6月刊

(中村学園大学) 黒木俊秀

一昨年(2024年), 著者は過去40年間に上梓した「コツ」シリーズを締めくくる『精神科治療のコツ』を出版したばかりだが, 2025年になって「コツ」シリーズと同一の黄緑色の装丁を施した本書がまたもや出版された。ただし, 一連の「コツ」シリーズが, 精神医学という「論」の分野ではなく, 精神医療という「行い」の場における「方法」「ヒント」の提案であったの対して, 本書は, いまの著者自身が属する「老い」の現場からの「方法」のアイデアを著述したものであるという。そこには, 昨今の超高齢社会における『「老い・いのち」を巡る』, 哲学もどきの『空理・空論』の氾濫に, ささやかな抵抗になるかもしれないと狙った, 著者らしい反骨の「コツ」が随所に仕込まれている。

とはいえ, 本書が装丁からは従来の「コツ」シリーズとは見分けがつかないように, その「方法・行い」の提案は精神医療の臨床現場における「行い」にも役立つに違いない。著者自身も『「治療」と「養生」の区別は判然としません』と述べる通りである。

事実, 本書を開いて30頁ほど読み進めると, いきなり『「神田橋臨床」の核心』として, 「その要諦は, 『いのちの声との対話・共ぶれ』です」という文章に出くわす。以下の2頁足らずの文章があまりに素晴らしいので, 一節だけでも引用したい。是非, 括弧と読点に注意しながら, 声に出して読んでいただきたい。

「前意識では感知しているけど, 認識にまで至っていない反応」を, 「共感」「逆転移」などと呼んではいますが, それに根差したものが, 最も自然な対応です。素人の援助のすばらしさです。そして, 素人の「共感」「逆転移」をさらに意識

化を深め, しかも, それでも意識できていない部分が山ほどあるはずだと, 自戒しながら対応し, 「共感」「逆転移」での感知を深めながら, 相手のいのちにとっての, 「ズレの少ない」援助・援助者たろう, と工夫するのが, 「神田橋臨床」の要諦です。

60年以上にわたる臨床現場の「行い」の経験に裏打ちされた稀代の精神療法家としての著者の矜持が見事に凝縮されていないだろう。

もっとも本書の大半は, 近年の著者が好んできた, 主として, いのちの本体である「包まれる身体」——それを「包む身体」が「学習体系・こころ」である(「二重構造」本書15頁)——に働きかける「行い」についての提案であり, 「舌トントン」「よいしょ」「踵枕・ストレッチボール」「骨バラバラ」「クラゲの体操」「寝床で運動」等々, 著者自身の「老い」の現実生活場面から発案された楽しくも奇怪な「方法」が次々と開陳される(著述は順序だっているわけではなく, 読者はどこから読み始めても構わない)。

既に数年前に高齢者の仲間入りを果たしている評者も, まずは基本の「舌トントン」から始めてみた。すると, これは乳児の舌挺出反射をはじめとする口腔反射を模していることに気づいた。なるほど, 「包まれる身体」と「包む身体」がまだ未分化な発達段階へ「退行」して, 最も原始的ないのちのセンサーの再「統合」を試みようというのか。その連想から評者自身もまた「包まれる身体」の衰えとそれに対する「包む身体」の抗いの構図の内にあることを洞察した。そんな老人の「ひとりでの内省精神療法」へ誘う本書は, やはり凡百の「幸せな老後のため」のハウツー本とは別格である。